



## 日本の医療と、札幌市医師会の今後

清田区支部 伊 東 修 一

本年度4/21キャリアブレインの報道によれば、財務省諮問機関である財政制度等審議会が行われ、“病院勤務医より開業医は2倍程度年収が高い。この格差の原因は中医協に原因があり、診療報酬の決め方について今後中医協を批判していく”との意見が出た、らしい。

ここで使っている一般診療所の収支差額とは“保険診療収入等から給与、医薬品支払い等の医療費用を引いた物”である。診療所開設にあたっての土地、建物取得費、その修繕等の積立金、医療機器代など含まれていない。以前から医師の間で、この開業医収入の算定方法がおかしい事は言われ続けていたし、きちんと調査すればこれがおかしい事はすぐ分かるはずだ。問題は財務省や厚生労働省が、元よりきちんとしたデータなど出す気は無く、自分達の社会保障費削減目標のためにいつも通りの手法を使ったことに尽きる。

このデータを自分達が選んだ委員に提示し、期待通りの発言を取り付ける。そして委員会の結論を医療費削減の根拠として使う、という従来手法だ。社会保障費削減で病院が弱ってきた事が世間に知れてしまったから、次は開業医から削減の財源を得ようとの作戦だと思う。医療崩壊で苦しむ国民に対して明らかな目くらまし、敵をすりかえる作戦だ。

最近是非正規社員のリストラなど、新自由主義の欺瞞が、世間にはっきり認識されてきた。一般国民にとって新自由主義がいいものかどうかなど、もう議論不要だろう。新自由主義は、一般国民には不利益なものなのだ。

医師の間でも、保守かそうでないかの立場に関係なく、小泉首相の医療改革に賛成する人は

ほとんどいなかっただろう。彼は引退したし、その後医療政策が変更されるかと期待したが、結局社会保障の抑制という根幹は強く生き続けている。それが今回の財政制度等審議会の結論ではっきりした訳である。

今後医師会も対策を立てるだろうが、その時に、今まで小泉首相に寄り添って来た議員を再び応援する事に抵抗はないのか？応援するならば、医療に関する意見をどのように変更したかを確認する事が必要ではないのか。医師会が応援した議員が再び敵に化けてしまう事は考えないのか？新自由主義的思想を持つ人までまとめて応援してしまうと、自分達の首を絞める事にならないか、等々心配はたくさんある。

医師会員の中にも、経営が順調な方も苦しい方もいる。勤務医でも現状に満足な方もいれば未来に不安一杯で仕事している方もいるだろう。医師会の会合とはいわば、大企業の社長と従業員、小企業の経営者と従業員が一同に会して解決策を話し合っているような場だ。

そんな中で医療政策の実現方法、政治的行動まで含んだ話をしても、結論など出るわけが無い。未だに新自由主義者が亡霊のように力を持つ政党を応援しても、傷ついた医師達がそれに一丸となれる可能性は低い。

医師会がもっと多くの会員を持ち、団結できる医療界の核となるためには、“純粹なる職能団体”になるのが正しい道だと私は思う。保険医療堅持の理想を掲げ、それが今まで国民にとってどれだけメリットがあったかを従来どおり根気よく語り続ければいい。OECD加盟20カ国中17位の医療費で、WHO評価第1位の医療状

況であったこの国の医療内容の充実と効率の良さを、もっと宣伝すればいい。国民は、日本の医療がそんなにいい物だったと知らないのだ。医師会は、最高の医療を続けてきた自信を持って、国民に尊敬される理想論を語り続けなければならないのだと思う。

医師会は本来もっと尊敬されるべき存在なのに、“結局利益団体なのだ。発言も結局利益目的にすりかえるのだろう”と、国民の評価が低い原因は何かという事にもっと思いをはせるべきではないか。偏った政治行動が不当な評価の原因？と、一歩下がって考えるべきではないか。医師会が語る正論が、国民、マスコミなどに余り力を持たないのは何故なのかと。

地域レベルでは札幌市医師会はどうすればいいか。医師会は、本来今よりもっと尊敬されるべき存在であろう。日常の診療だけでなく、夜間急病センター、雪祭りなどイベント時の医療協力など、かなり市民に貢献している。しかし訴訟の増加で分かるように、市民にはそんな行動は当然の事と思われるのではないかと。不当に評価が低くはないか。

医師会の発言や活動がもっと市民に尊敬を持って迎えられ、その行動を正当に評価され、司法やマスコミにも、“医療に関する事はまず札幌市医師会に聞けば間違いない”と思わせる状況になって欲しい。そうすれば類発する医療訴訟にも好影響を与えるだろう。

そして、不当な社会保障費削減論など簡単に吹き飛ばせるだろうと考える。

現在の医師会と医師連盟の関係は、“明示的な強制をせずに、同調を強要する”状態である。

しかし各医師個々で政治的思想は異なるのだから、理想論を語った後は党派など作り分けられればいいのではないかと。それらは互いに緩やかに結びつく団体として、複数存在していいので

はないか。そうすれば医師会は行動抜きに理想を語るだけの場となり、労働状況、思想に関係なくたくさんの医師が参加活動しやすくなり、会員数も更に増え、理想的医療政策実現のために今よりもっと力を持てるのではないかと、私はそう考えている。

厚生労働省の職員は制度を作る事を生業としているし、朝令暮改の如く、解釈を変更する事もある。そんな中で我々が医療制度の詳細を全て理解するのは不可能だ。制度の知識量ではかなうはずもない。では制度を理解しないと発言してはいけないのか？そんな事は決してないはずだ。黙っていると、今の国の状況では医師の生活は悪くなる一方だろう。あなたの生活は自分で守らなければいけない。だから各個人は、もっと発言し無知でないようにしたい。

無知とは“知識が無い状態”ではなく、“疑問を発せられない状況”だ（植民地解放闘争の理論的支柱、フランツ・ファノンの言葉。森巢博氏の本から抜粋）。まだ知識が無くても疑問を抱いたらまず発言する。“細部は理解していないが、全体の目指す方向がおかしいぞ”と疑問を呈するだけでいいのではないかと。

私は決して立派な人間ではないし、医師会の今後は？などいつも考えている訳でもない。多喜二になるのは怖いし、とてもチャベスやゲバラのようにはなれない。しかし日本の医療が壊れていく現状でそれを押しとめる一助になりたいし、札幌市医師会に期待する部分も大きいのだ。

言論の土台が崩壊している日本の中で、札幌市医師会が今後も、仮に理事達と反対意見でも発言しやすい環境を担保し、たくさんの会員を集めて他学会にも更に影響力を持つ、理想の医療を語る場となっていく事を期待している。

(美しが丘という内科)